

〈共同研究報告〉

国民国家の形成と『太陽』

——海外情報欄をとおして

中川 成 美

一 『太陽』海外情報欄の成立

雑誌『太陽』は「日清戦争実記」(全三冊、明治27年8月—29年1月)の成功によってもたらされた収益を元に創刊された。それはこの雑誌の性格が出発点において既に方向付けられていたことを私たちに想像させる。『太陽』発刊に伴って統廃合された雑誌⁽¹⁾に出された「太陽発刊ノ主意」⁽²⁾には、日清戦争の優勢によって欧米列強にその存在を知られ始めた日本が、次にどうその文化的側面を伝達していくかという問題が語られている。「我が帝国ノ武名世界ニ轟ク、同時ニ我文明ノ真光輝キ発揚スルハ豈目下

ノ急務ニ非ザルンヤ」。博文館はそのオビニオン・リーダーとして「帝国出版業ニ於テ一地步ヲ占メ、且ツ稍々欧米ニ知ラルヽニ至リシモ、未ダ十分ニ帝国ノ榮譽ヲ発揚スルノ雑誌ナキヲ慨シ、特ニ深ク今日ノ盛挙ニ感ズルアリ、因テ従前刊行ノ諸雑誌ハ本年十二月ヲ以テ悉ク廃刊シ、明年一月以後ハ弊館ノ全力ヲ『太陽』発行ノ一事ニ注」ぐと、ここに宣言したのである。

日清戦争に注がれた欧米列強の眼が帝国主義の貪欲な欲望に導かれた視線に支えられていたのを知りながら、欧米に「帝国ノ榮譽ヲ発揚」する雑誌を発信しようという発想は、自ずと『太陽』に複層的な構造を

与えていった。日清戦争の戦時報告(『日清戦争実記』には小川一真によって写真銅版の技術が導入され、茶の間で見る戦争の先駆けとなった)に一喜一憂する国民のナショナリズム感覚は、こうしたメディアの操作によって増幅・統合されていったが、一方にこの自国と他国の対比の感覚が世界を同時代的に解釈しようとする欲望を産出していったのである。「国民性」と「国際性」が不可分に一つの雑誌という空間内に要求され、しかもそれはそれまでのメディア規模を大きく凌駕する読者数へ向けて発信されなければならなかった。⁽³⁾総合雑誌という名称は未だ浮上していないものの、顔の見

えない広範な読者に向けられた『太陽』は、あらゆる国民の意識を代弁し、同時に啓蒙・教化しようという戦略のもと、総合的な情報伝達と個別の生活意識の規範化カノキヤイシヨクを試みたのは疑いようがない。散漫とも言われ兼ねないその編集方針が見事に成功するのは、そのどこからも読める雑誌の造りに加えて、多様な情報がそこに渦巻いて「世界の中の日本国民」としての立場を立体的に感知出来る魅力にあったと言える。

日清戦争の勃発とその戦勝は、まさしく近代の構造を決定付けた国民国家 (National States) の成員として自己を規定し、同時に他の国民国家との競合を認識する契機となって機能した。先進的な近代国家としての「日本」がここに要請され、近代人としての日本人を造形する役割を博文館というジャーナリズムは積極的に推進した。その主要なファクターの一つは、正確な情報の伝達と受容である。博文館社主大橋佐平家を中心とする幅広い人材のネットワークを活用した執筆陣は、それぞれの分野で

多彩な人脈を持ち、『太陽』の情報の精度は保証された。

また海外情報に関しては、明治二六年三月から一十月まで佐平は長男新太郎と共に欧米を視察、その折ロンドンのロイター社を訪問して電信の重要度を認識、「同社の通信を直接に日本に取次ぐことを約した」ことが『博文館五十年史』（博文館、昭和12年）に見られる。翌二七年五月に佐平は内外通信社を興し、電信で得た情報を謄写版刷りにした『内外通信』を創刊、各新聞社や一般購読者に配給した。「通信社史」（通信社史刊行会、昭和33年）によると、「大橋社長自ら陣頭に立ち、さきに帝國通信社の主幹であった竹村良貞を相談役として編集営業の一切を指揮し」たとあり、当時海外電報は横浜で発行されていた『ジャパン・デイリー・メール』紙のロイター特電のみであったのを、佐平は正式にロイター社と契約して直接に情報を獲得したことが伝えられている。日清戦争の戦況ニュースを始めとして、海外情報のニーズが高まった時

期だけに、この佐平のジャーナリストイックな感覚は的を射たものであった。しかし、この出費は厩大で収支的には引き合わなかった。そこで坪谷善四郎が社長になり改善策が講じられたが、結局明治三〇年に博報堂社主瀬木博尚に無償で譲り渡された。

この博文館の海外電信への注目は、『太陽』にも反映している。情報はいわば「生ま物」であり、迅速さと精度が求められる。情報の一次性に『太陽』はこだわっている。電信情報は勿論、海外雑誌を定期購読し、それを翻訳できる海外留学経験者を執筆陣、社員に加え、また各地に留学中のエリートから新鮮な情報を摂取した。大橋家の人々、また坪谷らの社員も海外視察に赴いてその体験を雑誌に生かしていった。先に挙げた「太陽発刊ノ主意」に付された「太陽目次」には「海外思想」と「海外彙報」の項目が設けられているが、それぞれ次のように説明がついている。

海外思想

欧米諸国ノ新聞雑誌若クハ新刊書中新規ノ卓見ニシテ世界

人衆ノ刮目傾聴スベキモノノ
 社会上、政治上、學術上ニ論
 ナク皆明晰ニ叙述シテ、以テ
 世界風潮ノ趨向ヲ知ラシム
 海外彙報 洋ノ東西ヲ問ハズ凡ソ海外ニ

生起セル政治上、經濟上、社
 会上ノ重大事件ハ総テ明瞭ニ
 之ヲ報道シ一見シテ時事ノ大
 勢ヲ知り兼テ他日搜索ノ便宜
 ニ供スベシ

このコンセプトによれば、「海外思想」
 欄は欧米を中心とする思想的動向の伝達を
 目的とし、「海外彙報」欄はよりヴィヴィ
 ッドな事件報道（戦争報道はその核となる
 だろう）を伝える役割を果たすために設定
 されている。そして重要なのはこれが索引
 機能を持っている点である。「他日搜索ノ
 便宜」のためとは、この雑誌が部門別⁽⁴⁾に切
 り離すことが可能であることを指示してい
 る。各部門を切り取って保存する読者がい
 たことを想像させる。

しかし、一方にこれらは相互に連関しあ

ってくるのは勿論で、各部門への情報の配
 属がきつかりとした方針をもっていたとは
 言い難いし、また写真、銅版挿絵などのヴ
 イジュアルな情報とセットで提供されてい
 る面も考慮にいれなければならない。『太
 陽』海外情報欄が、その後幾多の編集変遷
 を重ねるのはそのためである。

もう一つ言及しなければならないのは、
 「英文」欄である。表紙絵の太陽を浴びる
 地球の銅版画を横切って打たれた日本語誌
 名「太陽」の上部には「THE SUN」と英
 文タイトルが付され、裏表紙は英文表紙と
 なっている。飾り文字の誌名「THE
 SUN」の下に「A MONTHLY REVIEW
 OF POLITICS, ECONOMICS, SCIENCE,
 LITERATURE, AND ART」とあり、出
 版年月日が囲みで付され、目次「CON-
 TENTENTS」が「CONTRIBUTED ARTI-
 CLES, BIOGRAPHY AND HISTORY,
 GEOGRAPHY, POLITICS, LAW, LIT-
 ERATURE, FICTION, FINE ARTS,
 ECONOMICS, MISCELLANEOUS, LIST

OF ILLUSTRATIONS, MISCELLANE-
 OUS NOTES IN ENGLISH」に従って掲
 載記事タイトルの英文訳が施されている。
 そこを開けると「英文」欄が開始されると
 いう体裁は、現在の学術誌や大学紀要でと
 られる形式であるが、その発端は「太陽」
 によって作られたといえよう。この「英
 文」欄は神田乃武、添田寿一らによって書
 かれた日本事情、国際問題の論評などによ
 って構成され、いわば日本からの情報発信
 の窓口ともなった。大橋佐平の方針はここ
 にも鳴り響いている。もっとも大部分の日
 本人読者には読めないこともあって一巻一
 二号（明治28年12月）で終わるが、六巻一
 号（明治33年1月）から再開され、八巻九
 号（明治35年7月）からは「THE SUN
 TRADE JOURNAL」に変換、誌面の充
 実がはかられた。これは海外との商取引の
 拡大に伴ってその需要度が増したためであ
 る。当初から『太陽』はそうした海外の反
 応を意識して、⁽⁵⁾ 広告料を表紙裏英文目次の
 下に掲げている。

このように正確な海外情報をなるべく迅速に受容して、また日本からも正しい知識を発信しようとする姿勢は、他の雑誌には欠けていた側面である。対抗誌『国民之友』は三百号（明治29年6月）から「海外思潮」欄を独立させ、英文版の「FAR EAST」を発刊するが、これも『太陽』の斬新なアイデアに触発されての改革である。が、情報採取のシステムは質量的に『太陽』には遠く及ばなかった。その意味で『太陽』は国民的なビッグ・マガジンであり、総合雑誌の原型であったのだ。

二 海外情報欄編集とその変遷

——日清から日露前夜まで

海外情報欄は当初、「海外思想」欄と「海外彙報」欄の二本立てだったが、一巻二号で「海外思想」欄は消え、「海外彙報」欄のみとなる。「海外思想」欄一巻一号には「日本と欧州」（日清戦争に対するドイツ国内の評価、反響、関心【Echo】）、「魯国皇太子」（ニコライ二世の即位【Echo】）、「日

本に於ける初夏」（英国人アレフレッド・パーソンズによる京都、滋賀の小旅行記【Harper's new monthly magazine】）、「婦人の生活」（男女同権論、女性教育への提言）、「支那の将来」（日清戦後の中国について【Review of Review】）、「日本の勝利」（日清戦争における平壤占領から黄海海戦の推移）が掲載されるが、括弧内に示したドイツ、アメリカの雑誌の中から、日本を好意的に言及した記事を探りあげて訳載したことが了解される。これに対し同号の「海外彙報」欄は「北米合衆国」、「英吉利及露西亜」（スタンダード）、「英吉利」（諸新聞）、「露西亜」（倫敦発の報）、「仏蘭西」（昨年十一月十三日巴里発、フィガル新聞）、「独逸」（十一月二十七日倫敦発）、「葡萄牙」（十一月一日独逸キヨルン新聞）、「支那」（十二月六日上海申報）、「朝鮮」から構成され、こちらは電信記事と新聞記事訳で書かれたことがわかる。恐らく「海外思想」欄は、海外の雑誌に掲載された日本関係記事と特に興味を引きそうなトピック（王室記事など）

を中心に、また「海外彙報」欄は新聞、電信からヴィヴィッドな政治、経済、工業、文化、芸術、戦争などの海外情報をアット・ランダムに載せたものと思われる。

一巻二号で「海外思想」欄がなくなり、「海外彙報」欄のみとなるが、創刊号以来標題下に書かれたコンセプト「帝国以外大小の邦国に於ける万般の現象と趨勢とを觀察し、或は要項を叙記し、或は事態を論評し、座して宇内万国の治乱興亡汚隆盛衰する所の真相を知悉して遺憾なからしむ」という考えは、変更されていない。海外雑誌の日本関係記事が少なく、また海外トピックはこの欄とも重なるので、「海外彙報」欄一本に絞ったのであろう。

しかし、この欄も一巻一二号（明治28年12月）で終わり、二巻一号（明治29年1月）からは「雑報」欄に「海外雑俎」として縮小されるが、二巻四号（明治29年2月）から「海外事情」欄として復活、在外経験のある、また在外中の日本人による海外紹介、国際論評記事などと、海外新聞・雑誌の抄

録の二部立てで再開される。この抄録は一巻でとられた国別ではなく、「露国に於ける英国の勢力」といったニュース・ソースの新聞・雑誌のトピックに拠る小見出し分けになっている。ここでは一巻とは逆に文字どおりの最新の海外事情を受信する機能を重視して、例えば松本君平による「欧米に於ける新聞事業」(二巻四号—七号)とか、沢木吉三郎「各国無政府党の現在過去及未来」(二巻二三号—二五号)といった記事が掲載された。

しかし、三巻一号(明治30年1月)からまた編集方法が変わり、こうした海外情報各欄に分散され、「政治」欄に「海外時事」、「文学」欄に「海外文壇」、「実業」欄に「海外経済事情」という項目が立てられた。この他、「地理」欄に石黒忠憲「台湾日記」のような現地紀行なども入るので海外事情は各欄の分類内に吸収されたといえる。が再び三巻一号で「海外」欄が独立し、かつての「海外彙報」欄と同じ役割を果たすようになる。恐らくは情報の各欄へ

の入れ込みが繁雑になってかえって見にくくなったのが原因と思われる。「海外彙報」欄の情報が多岐に亙るので、それを分類しようとした欲望はここで頓挫した。

四巻(明治31年)で「海外」欄はもとの「海外彙報」欄に名称戻すが、五巻(明治32年)で「海外事情」とまた名称変更して「思潮」、「東洋」、「西洋」、「彙報」の四項目を立てるが、一六号(明治32年8月)から「思潮」欄が落ち、六巻一号(明治33年)では「思潮」と「時事」の二項目へ、また五号からはそれもなくなり、またかつての「海外彙報」欄と同じくトピック別の小見出しのみとなる。七巻(明治33年)では「特別通信」、「世界紀聞」、「各国近事」と項目分けされるが、これも一四号からなくなり、八巻一号からまた「海外通信」欄、「世界紀聞」欄、「内外彙報」欄に分散されてしまう。八巻七号(明治35年6月)から「海外事情」欄に戻り、九巻(明治36年)以降の誌面改革⁶⁾によって「評論之評論」欄の「外国」として統括される。

この編集の推移を概観すると、海外情報をどう分類して日本に脈絡づけるかという問題がそこにあったことが良くわかる。ニュース・ソースとしての海外新聞、雑誌、また電信情報の軽重をつけようとしながら、その連関の遠近がその折々の状況によって変化することに方策を持たなかったのは、決して編集能力が低かったからではなく、むしろその情報の選択に際して、ジャーナリスティックな勤が常に働いて、なるべく多量の情報を提供しようとしたために起こった錯綜であった。ここで提出された世界の膨大な動向情報は、「近代」という巨大に進展する世界構造に読者を同時代的な感覚をもって参画させていったのである。日清戦争から日露戦争までの十年間は国民国家の一員であることに何の違和感も感じなくなった日本人が、他の国民国家として外国を冷静に観察する時期でもあった。幾多の試行錯誤を繰り返しながらも、ついに日本人は同時代的「世界観」を獲得したといえよう。そこに『太陽』の一〇年間を重ね

合わせれば、一層そのことが理解されるに違いない。『太陽』は日清戦争の落とし子として誕生し、国家戦争勝利の興奮を子守歌とした。それは自ずと単純には存立しない世界構造の複層性へその眼を投じさせていった。西欧近代の欲望によって分断される世界、特にアジアへの西欧列強帝国主義の侵入は、日本の方向を決定づけていく。過度の産業化への転換、皇室制度の補強、貪欲なまでの欧米思想の受容と把握、近代軍事の増強といった日本の動向が余すところなく『太陽』には刻印されている。その中で海外情報欄は、一見相互に関連し合わないトピックがリニアに並べられているように見えながら、実はすべてが日本の「近代」の情景に絡み合う話題のみがピック・アップされているのだ。その情報を選択するメンタリティーの潜在的な意識に私たちは注目する必要があるだろう。そしてそれらは結果として日露戦争を準備していったのである。

三 現象としての海外情報欄

『太陽』の海外情報欄の情報記事に対してどの時期の編集者も分類の欲望から逃れられなかったのは、その雑多な情報が集積することによって生起する無秩序のためであった。前記の「太陽発刊ノ主意」に欧米諸国の著名雑誌、「当代評論」「イヂンバラ評論」「ハーバース月報」「北米評論」「觀察」「フィガロー」「反響」「小天地」「評論之評論」が「新聞及ビ書籍ヲ凌駕」する雑誌として挙げられているが、大橋佐平が海外視察の折りに見いだしたそれらを『太陽』に溶かし込もうとしたのは確かであろう。しかし、これらのどれか一雑誌を手本に『太陽』を創ったのではなく、このどれをも「総合」する雑誌を目指した所に大橋佐平のユニークさがある。ここに言及された雑誌は政治評論、家庭雑誌、文芸評論などかなり専門性をもった、すなわち読者を想定して誌面作りを行った雑誌であり、『太陽』の百科全書的な目論みはない。ま

た誌型、造本、挿絵・写真などの配置についても『太陽』は、これらの諸雑誌のどれかを真似たり、また各誌から少しずつ模倣して総合した形跡はない。逆にいえば、これ程無性格な雑誌を発行しようという発想自体が日本的であるといえる。この欧米のオピニオン・リーダー的雑誌と合わせて、新聞の即時的な第一次情報を同一誌面に並置しようとしたため、『太陽』海外情報欄の雑駁な印象は生じたのである。そして当初は評論と時事に欄を分けてその問題を解消しようとしたが、僅か二号でそれをやめ一元化したのは、やはりそうした雑駁性が相互に「交通」し合うメカニズムについて編集者も寄稿者も無意識の内に感知したのではないかと私は感じる。

日清戦時から戦後にかけて高揚する国民国家意識は、明治二八年四月の英、独、露の三国干渉によって最高に達する。この経過の中で、その欧米列強三国に対する屈折した興味が海外情報欄の随所に見られる。先ず量的にこの三国の記事が中心をなし、

あらゆる側面からの解析が志向されている。

「東亜に於ける英露」(二巻四号)、「露国のヴェネチエラ問題に対する意向」(同)、「露国に於ける英国の勢力」(二巻五号)、「独乙人口増殖の割合」(同)、「大英国の大なる理由」(二巻六号)、「独逸帝国創立二十五周年祭」(同)といった記事を追ってみると、そこにはこの「帝国」たちの存立の意味を丸ごと噛み砕こうとする意欲が満ちている。

一方、アメリカに対してはその産業力に注視している。「米国商業の盛況」(二巻六号)、「亜米利加人の娯楽旅行」(同)、「二大運河会社の合併」(二巻七号)など、資本構造の急速な成長を丁寧を追っている。三巻九号には鉄道王ヴァンダービルトの写真が冒頭に掲げられ、産業と富裕がパラレルに語られている。

文化面ではどうかであろうか。二巻六号に「マシニュー、アルノルドの書簡」、「トルストイ伯の新著」、「パウル、ヴェルレエン氏逝く」、七号では「万有文庫の創設者レク

ラム氏死す」などの情報が掲載され、三巻

になると「文学」欄に「海外文壇」の項目が出来るため、より詳しい新刊情報、各国文壇事情、文学評論の抄訳などが豊富に提供されている。この他、女性の地位問題、自由概念、欧米の植民地問題、ツーリズムの発生と交通機関の革新に至るまで、この情報欄が日本人に示した世界の情景は多彩である。草創期のこうした雑多でしかも刺激に満ちた情報の切り取りは、読者に新鮮な知識を促し、複雑に進行する「近代」を実感させたであろう。四巻九号(明治31年4月)の「奠都三十年」と銘打った臨時増刊はその中括りともいべきもので、クロニクルに情報の網目を整理・統括した。しかし既にこの時期に「日露戦争論」(四巻八号)がこの「海外彙報」欄に登場していることを忘れてはならない。国際政治の複雑性は、常にそうしたパワー・バランスによって成立しているのだ。

五巻(明治32年)から、「海外事情」欄になった情報欄は「思潮」、「東洋」、「西

洋」、「彙報」に分けられたが、ここでの

「東洋」は主に中国と朝鮮半島情報に集約して、「西洋」で採り上げられる英国やロシアとの対比が一層鮮やかになる。一六号での「東洋」に「東洋に於て欧米人の経営する諸会社の株式及社債」は「西洋」の「英国外国貿易の趨勢一斑」と対応するし、「彙報」の「北米の日本人排斥運動」(六号)は「米国物品の最大需要国」(一一号)に係わっていくだろう。こうした対比の構図からほの見えてくるものは、当然植民地問題、人種問題、経済格差問題と止まるところを知らない世界構造の矛盾である。六巻(明治33年)から七巻(明治34年)にかけてこの欄が縮小してトピックも「英国女皇一少女の書翰を受く」(六巻一〇号)、「米国の殺人」(七巻三号)、「倫敦の怪談」(七巻一〇号)というふうにならなくなるのも、その矛盾の止揚が決して単一的な思考で果たせないことを感知したからであろう。論評を加えないで「生」の情報を伝えるこの欄は、それまで見えなかったものを見せて

しまったのである。情報量もまた徐々に低下したが、九巻での誌面改革が再び海外情報の新たな切り取り作業を要請した。その広告文に「本年九月の改良以後の本誌は世界の注目する所となれり此際記者は更に奮起して記事体裁を改良し精進して愈よ文明の明星たらむと努む」とあるが、これは惹句ばかりでなく、近藤賤男、根岸由太郎という外国語専門の社員が入社して、この海外情報欄の補強が実際に諮られたのだった。そして、それはまさしく日露戦争前夜の国際的緊張を背景に展開したのである。

四 おわりに

創刊から九巻の誌面改革前までの『太陽』海外情報欄をざっと見渡したが、この概括が非常に粗いものであることを充分認識しながら、この欄が果たした役割についてまとめてみたい。日清戦争の渦中に出発したこの雑誌が、ナショナリズムの発揚という使命を帯びていたことは勿論である。また永嶺重敏が言及するとおり、「全国各

地に漸く形成されてきた近代的な知識人中産層とその家庭に、最大公約数的な時々刻々の社会的文化的知識を継続的に提供」し、そして「国民文化へと練り上げていく知的熔融炉」となったことも否定出来ない。しかし、日清、日露の戦間期の海外情報欄を通読する作業から見えてくるものは、そうした目的、効果とは別に、そこで生成された言説が相互に侵犯しあい、違ったコンテキストを作り出したことである。

編集者が切り取っていった情報は、コーナージュとなって誌面に出現し、メッセージを読者に投げかけるのだが、それらは決して同語反復することなく、他の欄と互換、反発、補填しながら、次の情報を産出していった。明治三〇年代は国粹保存と西欧化のジレンマの克服時期と概括されるが、『太陽』海外情報欄の推移からでも察せられるとおり、圧倒的な質量を伴って襲いかかる情報は、もはや分類することが不可能なほど、日本の国家機構に食い込んでいる。これは直ちに西欧近代の主導性を意味する

のではなく、世界構造のパワー・バランスに日本もまた国民国家として参入し、その一端を構成していることを例証していた。それはアジアの植民地化に直面した日本が、いち早くそのメカニズムを察知して、「帝国化」への道を選択したことから明らかだろう。当初、日本の情報を発信しようとした『太陽』が、専ら情報収集に向かうのも、こうした相対化の中で獲得した現実的な戦略であった。問題はそうした意図の反作用として出現する情報の多層化である。

『太陽』は各欄が独立して収集・整理出来る索引機能があったが、海外情報欄はそうした索引を重ねることによって情報相互が「交換」したり「抹消」し合ったり、また他の欄に「潜入」したりする、いわば実験場の働きをもっていた。確定的と思われる情報も、世界の各地に生起する事件情報の前には不確かな記号に変化する。西欧の強国を追っていった海外情報欄がやがて南米、アフリカ、アジア、中近東の情報を引き出し、それらはまた他の表象記号になって、

日本にフィード・バックされる。この時に日本は自らのイメージ、セルフ・イメージの不確定性を認識する。比定したり、共感したりといった作業だけでは、決して浮上しない世界構造の力学をいやでも感じていることになる。海外情報から摂取した日本イメージに反発するばかりではなく、同化、もしくは擬態する必要を知ったとき、もはや全く独自の文化、独自の精神性は虚妄であることを悟らなければならなかった。

博文館はメディアのそうした側面を活用し、利用したが、一方に情報の制御に対して充分の配慮をはからなかった。常に分類しようとしながら、なし崩しの形で、裸の情報提示していった『太陽』海外情報欄のジレンマは、その出発点において解決されなければならなかった。情報は独占して占有してしまふことだ。現在と比べて圧倒的に少量の情報に支配されていたのだろうという幻想をもちがちなこの時期だが、実は既に情報の基礎的システムは完成していたと見た方が無難である。電信であれば西

欧世界とのタイム・ラグは一日から三日、郵送でも一カ月余り⁽¹⁰⁾という「落差」はそれほど大きな違いだったのだろうか。こうした状況下で『太陽』はいわば国民文化を形成しながら、その雑駁な情報配給によってそれへの懐疑を呼び起こす誌面を無意識に作り出していったのだった。

雑誌『太陽』はそうした意味で、国民国家としての日本の言説を形成していったのと同時に、またそうした国民意識に収納されるのを拒む一群の読者を生み出していたのではないか。この推論に立って、今一度海外情報欄を各欄と横断させ、交差させて読む必要を強く感じる。それは今回の対象とした日清、日露戦間期から、日露戦後へ進む行程で、より必要度が高まる予感がしている。それはもう一方に強大な帝国の影としての国家によるメディア支配欲望が噴出し始める、まさしくその瞬間とも重なっていくからである。

注

(1) 『太陽』によって明治27年12月に統合された雑誌は『日本大家論集』（創刊明治20年6月）、『日本之法律』（明治21年2月）、『日本商業雜誌』（明治23年10月）、『婦女雜誌』（明治24年1月）、『日本農業新誌』（明治25年1月）、『文芸共進会』（明治27年1月）があり、その他『日本之少年』（明治22年1月）、『尋常小学幼年雜誌』（明治24年1月）、『学生筆戦場』（明治27年1月）は『少年世界』（明治28年1月）に統合され、新たに『文芸倶楽部』が明治28年1月にスタートした。

(2) 『婦女雜誌』終刊号（第4巻23号、明治27年12月1日）掲載のものを閲覧。

(3) 創刊号六版表紙に二八万五千部とある。日清戦争以後、定期刊行物の部数が飛躍的に伸びるが、それでも『国民之友』最高時の二万五千部前後、新聞でも最高の『万朝報』が一回八万一千部（明治29年）のことを考慮に入れると、『太陽』のメディアでの占有率が如何に膨大なものであったかが推し量れる。（参考、

山本文雄編「日本マス・コミュニケーション史」東海大学出版会、昭和45年）

- (4) 創刊号は「論説」、「史伝」、「地理」、「小説」、「雑録」、「文苑」、「芸苑」、「家庭」、「政治」、「法律」、「文学」、「科学」、「美術」、「商業」、「農業」、「工業」、「社会」、「海外思想」、「与論一斑」、「社交案内」、「新刊案内」、「海外彙報」、「海内彙報」、「英文」の各欄で構成されている。
- (5) 全ページ広告が一回一三ドル、一年で一八七ドル二〇セントとあり、またアメリカへの雑誌送付郵送料七銭、ヨーロッパ一四銭とある(二巻七号、明治29年4月)。因に一冊は一五銭、年間購読料三円二〇銭である。
- (6) 八卷一五号(明治35年12月)に「太陽第九卷大改良」として、『太平洋』の月刊化に伴って誌面の「改良」を行う広告が掲載されている。
- (7) (6) の引用に同じ。
- (8) 「明治期『太陽』の受容構造」『出版研究』21号、一九九一年三月
- (9) (8) に同じ。
- (10) 日本郵船の定期欧州航路の初めての